

いわゆる「アジア式関係節」について*

JOHN WHITMAN

国立国語研究所・コーネル大学

1. はじめに

バーナード・コムリーは一連の研究 (Comrie (1996, 1998, 2010)) において「アジア型」関係節の存在を提唱している。これらの研究では、寺村 (1975, 1977a, 1977b) や Matsumoto (1997) の研究を引き、日本語を代表的な例として挙げているが、寺村や Matsumoto よりも普遍的な仮説を提唱している。その仮説は、アジア大陸を中心に、日本語に代表される一群の言語には、いわゆる連体修飾構文が下記の (1) の特徴を示しているというものである。

- (1) a. 関係節とその他の連体修飾構文はすべて同じ構造を有する。
 - b. 関係節における空範疇はすべて空の代名詞 (pro) であり、移動 (抽出) の痕跡 (trace) ではない。

(1) の特徴を示す連体修飾構文を Matsumoto, Comrie and Sells (forthcoming) は Noun-Modifying Clause Constructions (NMCC) と名付けている。本稿では、NMCC がすべて (1) の特徴を持つという仮説を Generalized Noun-Modifying Clause Construction Hypothesis (GNMCCH, 統一連体修飾構文仮説) と呼ぶことにする (Bugaeva and Whitman (2014) 参照)。本稿の目的は NMCC 「統一名詞修飾構文仮説」を検討することである。本稿の結論は概ね下記の 3 つである。

- (2) a. いわゆる「アジア型」の連体修飾構文は日本語を始めアジアの言語に限られたものではなく、英語など、「非アジア型」の言語にも対応

* この研究は韓国学中央研究院の補助金 (MEST) (AKS-2011-AAA-2103) の援助を受け行ったものである。同研究院に謝す。

す構造が存在する。

- b. 寺村がいう「内の関係」の関係節には移動（関係節化）による派生の根拠がある。島制約がかかる。
- c. 表面上は島制約がかからないように見える例は、上位節の「大主語」の関係節化により派生される (Heycock (1993), Sakai (1994))。いわゆる「アジア型」言語における関係節の特殊性は連体修飾構文それ自体によるものではなく、「大主語構文」の存在によるものである。
- d. いわゆる「連体修飾構文」は二つに分類することができる。名詞補文類と関係節類である。この二種類の間には構造的な違いが見られる。

2. 「アジア型」の名詞修飾表現はアジアの言語に限られたものではない

「連体修飾構文」は、生成文法の流れでは、Ross (1967) の研究以来、complex NP「複合名詞句」と呼ばれてきた。「複合名詞句」という用語では、連体節と主要名詞の間の関係は「修飾」modification には限られない。日本語の代表的な複合名詞句構文は下記の (3)-(6) である。

- (3) 関係節 (寺村：内の関係)
[[太郎が_e 焼く] 魚]
- (4) 命題態度名詞補文 Propositional attitude noun complements (寺村：外
の関係)
[[太郎が魚を焼いた] 証拠]
- (5) 知覚名詞補文 Perception noun complements (寺村：外の関係)
[[太郎が魚を焼く] 匂い]
- (6) 付加節の関係節 Adjunct relative
[[トイレに行けない] コマーシャル] (Matsumoto (1993: 102))

(3) と (4) はそれぞれ一般的な関係節と名詞補文節である。日本語の場合、関係節と名詞補文の具現は表層的には同じであるが、これは (7)、(8) の英語の対応例に関しても言えることである。

- (7) [the fish [that Taro roasted]] (関係節)
- (8) [the proof [that Taro roasted the fish]] (命題態度名詞補文)

いうまでもなく、(7)と(8)の間には意味・統語論的な違いが数多くあるが、それは、第3節で示すように日本語の(3)、(4)に関しても同様である。GNMCCHでは、複合名詞句の主要名詞とそれにかかる節との関係は、日本語のような言語では「何でもあり」、つまり自由だと主張し、それは英語のような言語における複合名詞句と大きく違うという。その主張を裏付けるために(5)と(6)のような例がよく挙げられる。(5)の場合は、対応する英語の複合名詞句は表面上は異なって見える。

(9) [the smell of [Taro roasting fish]]

日本語の(5)の複合構文の述語は連体形であり、形態論上テンスが示されているように見えるのに対して、英語の(9)の複合構文の述語は現在分詞で、テンスが示されていない。

しかしこの違いは両言語の複合名詞句構造の間の違いによるものではない。知覚述語(perception predicate)の間の一般的な違いである。(5)と(9)は、知覚述語が複合名詞句の主要名詞になっているが、知覚述語が動詞であっても、その補文の述語は日本語の場合には連体形、英語の場合には現在分詞となる。

(10) 私は[太郎が魚を焼く]を嗅いだ/見た。

(11) I smelled/saw [Taro roasting fish].

このように形態論的に異なるにもかかわらず、知覚述語の補文は日英両語で極めて良く似た特徴を示す。述語が動詞でも、主要名詞でも、構造的に上位のモダリティは容易には許容されない。

(12) a. *私は[きっと太郎が魚を焼くだろうのを]嗅いだ/見た。

b. *[[きっと太郎が魚を焼くだろう]嗅い]

(13) a. *I smelled/saw [apparently Taro roasting fish].

b. *the smell/sight of [apparently Taro roasting fish].

これに対して、(4)の命題態度名詞補文の中には「きっと…だろう」やprobablyのようなモデルは許容される。

(14) [[きっと太郎が魚を焼いただろう]証拠]

(15) the proof that [apparently Taro roasts fish]

(6)も日本語的、つまり「アジア型」複合名詞句の代表例とされるが、同じよう

な構造は英語でも可能である。

(16) [the (kind of) commercial [where you can't go to the bathroom]]

(18a, b) がその実例である。

(18) a. It was [the kind of commercial [where people watching TV yelled to others in the house, "Quick! Get in here! That commercial I was telling you about is on!]] (Hillsman (2004: 25))

b. You have to watch out that you don't have [the kind of commercial [where people in bars start throwing things at the screen].
(<http://www.nytimes.com/1989/04/13/nyregion/campaign-matters-tune-in-comedy-drama-or-sports-you-ll-get-lauder.html>)

英語の (17), (18) には関係代名詞 where が入っているが、主要名詞の関係節の関係は単なる「場所」ではなく、(6) と同様、「場面」である。日本語の (6) と同様 (17), (18) も、寺村がいう「外の関係」を示す複合名詞句である。その根拠は「遠距離解釈」(long distance interpretation) が成り立たないことである。「内の関係」を示す一般的な関係節の場合、主要名詞は関係節の中に埋め込まれた従属節の中で解釈することができる：

(19) [[e₁ トイレに行けないと] 太郎がいう] 人]

ところが、「外の関係」の場合には、上位の述語をとばした「遠距離解釈」は不可能である。つまり、(20) でいうコマーシャルの属性は「トイレに行けない」だけではなく、「トイレに行けないと太郎がいう」という内容でなければならない。

(20) [[[トイレに行けないと] 太郎がいう] コマーシャル]

これは英語の (21) でも同じである。

(21) [the kind of commercial [where Taro says [you can't go to the bathroom]]]

3. 関係節における空範疇はすべて空の代名詞と振る舞いが違う

Kuno (1973) は日本語の関係節の中に主要名詞と同指示の再述代名詞 (re-

sumptive pronoun) が許容される環境があることを指摘している (Haig (1976), 井上 (1976) も参照).

(22) [[自分₁/?彼女₁ が/e₁ 可愛がっていた] 犬が死んでしまった] 女の子₁

(23) [[自分₁/?彼₁ が/e₁ 着ている] 洋服が汚れていた] 紳士₁

音形を持つ代名詞が空の代名詞と交替する現象はよく見られるが, Kuno や Haig は下記のような関係節には再述代名詞は許容されないことを指摘している (例文は Haig (1976) に基づく):

(24) [*自分₁/*彼女₁ が/e₁ 犬を可愛がっている] 女の子₁

(25) [*自分₁/*彼₁ が/e₁ 洋服を着ている] 紳士₁

(22), (23) とは違い, (24), (25) では主要名詞と代名詞の間に節の境界が1つしか介入していない. 一般の従属節の場合には, 同じ環境, つまり先行名詞との間に節の境界が1つしか介入していない環境⁷⁴には, 代名詞は許容される (話者により再帰代名詞でない「彼女」・「彼」は許容度が落ちる).

(26) 花子₁ は [自分₁/?彼女₁ が/Ø₁ 犬を可愛がっていた] と言った.

(27) 太郎₁ は [自分₁/?彼₁ が/Ø₁ 洋服を着ていた] と言った.

関係節における空範疇と一般の埋め込み文における空の代名詞を同視するGNMCCHでは, (22), (23) と (26), (27) では空範疇が代名詞と交替するのに, (24), (25) ではなぜ交替しないのかを説明する必要がある. 「空範疇の先行名詞句が明らかでない場合に限って代名詞との交替が可能だ」というような単純な説明では不十分である. なぜなら, (23) のような関係節では, 「着ている」の主語は明らかに「紳士」であり, (28) の非文法性から分かるように「紳士」以外の主語ではありえない.

(28) *太郎が着ている洋服が汚れていた紳士

それに対して, (23) から分かるように, この構造では空範疇と代名詞との交替が許容される.

関係節における空範疇と再述代名詞の交替はさらに複雑である. 主要名詞との間に節の境界が1つしか介入していない場合でも再述代名詞との交替が許容されることがある:

- (29) a. そこ₁から代表がたくさん来た村₁ (Kuno (1973) の例に基づく)
 b. 自分₁/*彼女₁の犬が死んでしまった女の子₁

おもしろいことに、今まで見て来た例と違って、(29b) の関係節では「自分」との交替は許容されるが、「彼女」との交替は許容されない。この理由については、次節で述べる。

4. 大主語関係節化分析

Kuno (1973) は、(22) や (23) のような関係節は島制約（正確には、Ross (1967) の述べる複合名詞句制約 Complex NP Constraint) の違反であることを指摘している。このような島制約の違反を根拠にして、GNMCCH を提唱する研究者は (1b) の如く、日本語の関係節は移動（抽出）により派生されるものではないと主張する。ところが Heycock (1993: 181) は、(22) や (23) のような例は「大主語」が関係節化された例であると指摘した (Sakai (1994) も参照)。本稿では、Heycock と Sakai によるこの分析を「大主語関係節化分析」と名付けることにする。大主語関係節化分析では、(22) と (23) は複合名詞句制約の違反ではない。この分析では (22) の構造は (30) のようになる。

- (30) [_{t₁} [自分₁/彼女₁が/pro₁ 可愛がっていた] 犬が死んでしまった] 女の子₁

移動（関係節化）の痕跡は、島となるはずの内側の関係節「可愛がっていた犬」の中にあるのではなく、島の外側の主語の位置にある。日本語においてこの位置に主語が可能であることは (31) で分かる。

- (31) 女の子₁が [自分₁/彼女₁が/pro₁ 可愛がっていた] 犬が死んでしまった。

大主語関係節化分析では前節で紹介した再述代名詞は、実は大主語の痕跡に先行される、一般的な代名詞と見なすことができる。再述代名詞を特別に仮定する必要はない。(29a), (29b) の構造は下記の (32) のようになるのであるが、代名詞の許容度は対応する大主語構文 (33) と平行している。

- (32) a. [_{t₁} そこ₁から代表がたくさん来た] 村₁
 b. [_{t₁} 自分₁/*彼女₁の犬が死んでしまった] 女の子₁
 (33) a. その村₁がそこ₁から代表がたくさん来た。

- b. その女の子₁が自分₁/*彼女₁の犬が死んでしまった。

70年代以来、何人かの研究者が指摘したように、日本語の関係節において島制約は自由に違反できるものではない(井上(1976), Whitman(1976), Hasegawa(1981), Hoshi(1995, 2004) 参照)。特に、関係節化された名詞句が主語でない場合及び、主要名詞が抽出された関係節が主語でない場合には、「二重関係節化」が許容されがたいことが井上(1976)によって指摘されている。(34)が前者の例である。

- (34) *[[[[その学者が e_1 e_2 送った] 書店₁] が焼けた] 本₁]
(Inoue(1976: 179))

大主語関係節化分析で予測されるように、(34)に対応する大主語構文も許容度が低い:

- (35) *その本₂が[[その学者が e_1 e_2 送った] 書店₁] が焼けた。

Inoue(1976)が述べたこの Subject out of Subject Condition (SOS 条件)の反例があることは Whitman(1976)以来広く指摘されている。Comrie(1996: 1978)は Haig(1996)の次の例を引用している。

- (36) [[[[e_1 e_2 食べた] 人] がみんな死んでしまった] 毒饅頭]
(Haig(1996: 60))

(36)は、(35)と同じく主要名詞「毒饅頭」が関係節「食べた人」の直接目的語に対応するが、(35)と比べて許容度が高いとされる。大主語関係節化分析で予測されるように、(36)に対応する大主語構文も(35)と比べて許容度が高い:

- (37) その毒饅頭₂が[[e_1 e_2 食べた] 人] がみんな死んでしまった。

Kuno(1973: 70)が指摘するように、「大主語化」が可能な名詞句は普段、文の最左にあるものである。Kunoが指摘するこの「最左条件」は井上のSOSと極めてよく似ている。(35)と(37)では、大主語化された名詞句は最左の位置にある e_1 ではなく、その右にある e_2 であるので、最左条件の違反である。(37)のように、最左条件の違反が許されるのは、文が大主語の属性を表すように解釈しやすい場合に限られる。つまり、(35)と(37)の違いは、「(それを)食べた人がみんな死んでしまった」ことは「毒饅頭」の属性として捉えやすいのに

捉えにくいということである。
 (★つまり、(35)と(37)の虚いよ、へ」
 で始まっているので!)

いわゆる「アジア式関係節」について

195

対して、「その学者が(それを)送った書店が焼けた」ことは「本」の属性として捉えにくいのである。同じことを関係節(34)と(36)についても言えるが、それは関係節独特の特徴ではなく、関係節が派生された大主語構文の特徴である。次節に示すように、一見「アジア式関係節」を有するよう見える言語でも、大主語構文がなければ(22)、(23)や(36)のような関係節は存在しない。

5. 重要なパラメーターは「アジア式関係節」ではなく、「日本式大主語構文」である

Han and Kim (2004) は韓国語における二重関係節化も大主語を関係節化したものと述べ、Heycock (1993) と Sakai (1994) と同じ大主語関係節化分析を採用している。韓国語も大主語構文を有する言語である。大主語関係節化分析の予測通り、(38a) のように二重関係節化が韓国語で許容される例には必ず(38b) のような大主語構文が対応する。

- (38) a. 디자인한표지가당선된그학생
 [[[e₁ e₂ ticainha-n] phyoci₁] ka tangsentoy-n] ku haksayng₂].
 デザインした 表紙 が 当選された その学生
 「デザインした表紙が選ばれたその学生」
 (Han and Kim (2004: 324))

- b. 그학생이디자인한표지가당선했다.
 Ku haksayng₁ i [[pro₁ e₂ ticainha-n] phyoci₂] ka tangsentoy-ess-ta.
 その学生 が デザインした 表紙 が 当選された
 「その学生がデザインした表紙が当選された。」

Han and Kim によると、(39a) のように大主語構文が許容されない場合には、(39b) のように対応する二重関係節化も許容されないという ((39a), (39b) に対応する日本語は可能である)。

- (39) a. *그아이가강아지가짖었다.
 *Ku ai ka kangaci ka cic-ess-ta.
 その子 が 子犬 が 吠えた
 「その子が子犬が吠えた」 (Han and Kim (2004: 325))
 b. *강아지가짖는아이

한글
예문
스페이스
가
아이가
강아지가
吠えている
아이가

*[[kangaci ka cic-nun] ai]

子犬 が 吠える 子

「子犬が吠える子」

一見「アジア式関係節」を有しても、大主語構文を有しない言語は少なくない。サハ（ヤクート）語は日本語と同様、「外の関係」の複合名詞句は「内の関係」の関係節と同じ形である（Kornfilt and Vinokurova (2012) 参照）。

(40) [et buh -ar] sit -a

肉 焼ける -過去分詞 臭い -3 人称単数

「肉が焼けた臭い」

(Kornfilt and Vinokurova (2012))

サハ語にも (41) のような、一見島制約の違反に見える例もある。

(41) [[[e₁ e₂ ket-er] taŋah-a₂] kirdeex] kihi₁]

着る-過去分詞 洋服-3 人称単数 dirt person

「着ている洋服が汚れている人」

(Kornfilt and Vinokurova (2012))

ただし、(41) の関係節には3 人称単数の属格一致語尾 -a がついている。この語尾は関係節の主要名詞とも関係節の中の主語とも一致を示す。単文には主語と一致する語尾は一つしかないの、日本語や韓国語にあるような大主語構文（言い換えれば、一つ以上の主語が可能となる構文）は認められない。Kornfilt and Vinokurova の分析では、サハ語の関係節の主要名詞に後続する一致の語尾は、関係節の中の空の再述代名詞を認可するという。一致の語尾に認可される場合以外、日本語や韓国語のような二重関係節化は認められないという：

(42) [[[e₁ e₂ *abaahikör-ör ministr₁ beje-tiger tiij-im-mit

悪魔見る-過去分詞 大臣自分-3 人称与格 至る-再起-過去

presiden₂-c

大統領 -3 人称

「(自分を) 嫌っている大臣が自殺した大統領」

(41) には「大統領」を「悪魔見る」(=「嫌う」) の目的語として認可する一致の語尾がないので、関係節は非文となる。サハ語には、「アジア式関係節」で見られるはずの「外の関係」の複合名詞句 (40) が存在するにも関わらず、大主語構文がないため、一致の語尾に認可される場合以外には日本語や韓国語にあるような二重関係節化現象はないのである。

6. 関係節化分析のいわゆる問題点について

「大主語関係節化分析」を根本的に採用する立場の研究でも, Hoshi (2004: 11) は (43) のような慣用句から関係節化が不可能であることを指摘している。

- (43) a. 太郎が臍を固めていた。
b. [[[太郎が再び同じ過ちをすまいと] 固めていた] 臍]

(43a) の「臍を固めていた」には「決心を決めていた」という、慣用句としての意味があるが、関係節 (43b) にはその意味がない。それに対して、(44a) のような英語の関係節には、慣用句の意味が保たれる。

- (44) a. [The headway_i [that Mary made *t_i*]] was impressive.
b. *The headway was impressive.

関係節の主要名詞 headway は (44b) で分かるように単独で述語 be impressive の主語として成り立たないので、その主要名詞が派生上、元々関係節の中で、make (headway) の目的語として解釈されるという結論になる。これは関係節化の移動派生説を裏付ける古典的な議論であるが、(43) を見る限り、その議論は日本語の場合には妥当でないようである。

ところが、英語にも関係節化が不可能な慣用句は少なくない。(45)、(46) がその例である。

- (45) a. Mary bought the farm.
慣用句の意味 = 「メリーが死んだ」
b. [[the farm [that Mary bought]
「メリーが買った農場」(慣用句の意味がない)
(46) a. Mary kicked the bucket.
慣用句の意味 = 「メリーが死んだ」
b. [[the bucket [that Mary kicked] (literal meaning only)
「メリーが蹴った桶」(慣用句の意味がない)

一般的には、慣用句内の名詞の量化あるいは修飾語がつく場合にのみ慣用句の関係節化が可能である。

- (47) a. Mary made a lot of headway.

「メリーがたくさん掬った」(慣用句の意味)

- b. Mary kicked the heavy bucket.

「メリーが重い桶を蹴った」(慣用句の意味不可)

- c. Mary bought the little farm.

「メリーが小さい農場を買った」(慣用句の意味不可)

実際には、日本語にも関係節化が可能な慣用句はある。(48)がその例である。

- (48) a. Xに桶突く(慣用句の意味は「Xに反抗する」)

- b. [一度親に突いた盾]をすごすごと撤回するのもプライドが許さなかった。

(白石末子「いのち燃やしてミシン和裁にかけた女の挑戦」, 81)

(48b)の関係節では、英語の(44)と同様、慣用句の意味が保たれる。関係節化の移動派生説を否定するGNMCCHでは、(48b)の動詞「突いた」の目的語は「盾」に先行された空の代名詞というかもしれないが、(49)で分かるように、「盾」の代わりに空の代名詞を入れると慣用句の意味が保たれない。

- (49) A: 花子が親に盾を突いたね。

B: #はい、それを/O突いたね。

(△ みなろ)

↑
必ずしも変える必要はありませんが...

Davis (2006) は日本語の関係節の移動派生節に対するもう一つの問題点を指摘している。(50)のような英語の関係節には二通りの解釈がある(Bhatt (2002))。

- (50) the first book that John said that Tolstoy has written (Bhatt (2002: 57))

- a. 「高い」解釈: the λx first [book, x] [John said that Tolstoy had written x]

(‘the first book about which John said that Tolstoy had written it’)

- b. 「低い」解釈: the λx [John said that [first [Tolstoy had written [book, x]]]]

(‘the x such that John said the first book Tolstoy had written was x’)

Davis (2006: 5) は、再述代名詞には「高い」解釈しかないことを指摘している:

- (51) This is the first book that they said if Shakespeare wrote it, then the Norton Anthology would need revising.

- a. 「高い」解釈: the λx first [book, x] [they said if Shakespeare wrote x then the Norton Anthology would need to be revised] ('the first book about which they said if Shakespeare wrote it then the Norton Anthology would need to be revised')
- b. 「低い」解釈 (不可): the λx [they said that if [first [Shakespeare wrote [book, x] then the Norton Anthology would need to be revised]]] ('the x s.t. they said if x was the first book Shakespeare wrote then the Norton Anthology would need to be revised')

日本語の関係節 (52) には「低い」解釈は不可能である (Davis (2006: 3)):

(52) [[[三島が書いたと] 先生が教えてくれた] 最初の本]

- a. 「高い」解釈: the λx first [book, x] [teacher said that Mishima wrote x]
「三島が書いたと、先生がはじめて教えてくれた本」
- b. 「低い」解釈 (不可): the λx [teacher said that [first [Mishima had written [book, x]]]]
「三島がはじめて書いたと、先生が初めて教えてくれた本」

この事実に基づいて, Davis (2006) は日本語の関係節における空範疇は空の再述代名詞であると結論づける。

ところが, (52) の上位の述語「教えてくれた」は叙実的述語である。英語でも, 叙実的述語の場合には「低い」解釈は不可能である:

(53) (the first book that John informed Mary that Tolstoy wrote

- a. 「高い」解釈: the λx first [book, x] [John told Mary that Tolstoy wrote x] ('the first book in reference to which John told Mary that Tolstoy wrote it')
- b. 「低い」解釈 (不可): the λx [John told Mary that [first [Tolstoy had written [book, x]]]] ('the x such that John told Mary that the first book Tolstoy wrote was x')

日本語でも, 上位の述語を非叙実的述語に取り替えると, 「低い」解釈が可能になる (この指摘は坪本篤朗氏に謝す)。

(54) [[[太郎が失くしたと] 花子が言ってた] 最初の恋]

- a. 「高い」解釈: the λx first [love, x] [Hanako said that Tarox]

「太郎が失くしたと、花子のはじめて言った恋」

- b. 「低い」解釈: the λx [Hanako said that [first [Taro lost [love, x]]]]

「太郎のはじめて失くしたと、花子が言った恋」

(53) にも (54) にも再述代名詞を入れることができるが、(54) に入れると「低い」解釈が再びなくなる。

- (55) [[[太郎がそれを失くしたと] 花子と言った] 最初の恋]

(55) と (54) の解釈上の違いを考慮すると、(53) の空範疇は再述代名詞ではあり得ないことが分かる。

本節では、移動派生説にとって問題点として指摘された二つの現象を再検討した。いずれの問題点も、より精密に考えると、実際には移動説を支持するように理解できることが分かった。

7. 関係節と名詞補文

(1a) に述べたように、GNMCCH では、関係節とその他の連体修飾構文はすべて同じ構造を有するとされる。トルコ語は日本語と同じく、関係節に関係代名詞がなく、関係節と名詞補文がどちらも主要部後置型の言語であるが、名詞補文の主要部にのみ 3 人称単数の所有格一致語尾が付く。関係節と名詞補文の間のこの違いに基づいて、Comrie (1998) はトルコ語は「アジア式関係節」を有する言語でないという。ところが、Bugaeva and Whitman (2014) は、先行研究では「アジア式関係節」を有するとされるサハ語、ネネツ語とアイヌ語にも、トルコ語と同じ関係節と名詞補文の間の違いが見られることを指摘している。サハ語の知覚名詞補文 (40) の主要部名詞には 3 人称単数の所有格一致語尾 -a が付くが、(41) の主要部名詞 kihi 「人」には付かない (同じ (41) の内側の関係節の主要部 tanah 「洋服」に付く語尾 -a は、主語との一致を示すもので、機能が違う)。

日本語には一致がないが、関係節と名詞補文を区別する現象は容易に見つかる。関係節には McGloin (1985) が名付けた「ノ代名詞化」(No Pronominalization) が可能であるが、知覚名詞補文と命題名詞補文には可能ではない。

- (55) a. [[漁師が焼いた] 魚] は無くなったが、[[君が焼いた] の] は残っている。

- b. *[[さんまを焼いた] 匂い] は消えたが、[[いわしを焼いた] の] は残って

いる。

- c. *[[さんまを焼いた] 証拠] は消えたが, [[いわしを焼いた] の] は残っている。

この違いは主要部名詞の内容と関係がない。(55c)の「証拠」は抽象名詞であるが、同じ名詞を関係節(56)の主要部名詞にすると、ノ代名詞化が可能になる:

- (56) [[花子が見つけた] 証拠] は消えたが, [[太郎が見つけた] の] は残っている。

「トルク語, サハ語, ネネツ語, アイス語では一致を示す名詞補文の主要部が、なぜ日本語ではノ代名詞化を可能にするのだろうか。意味論的に考えると、名詞補文は主要名詞の項であるのに対して、関係節は純粹の修飾要素である。項は一致を引き起こす。同じように、項のほうが主要部に近いとされる。DP説で考えると、主要部の項である名詞補文はNの投射NPの中にあるが、関係節はNPの外、DPの投射にあると言われる。ノ代名詞化というのは、Nの投射を「ノ」に取り替える現象だとすれば、(55a)と(55b, c)の違いは説明できる。このように考えると、トルコなどと同じように、日本語の関係節と名詞補文の間に構造的な違いがある、という結論になる。

8. まとめ

本稿は「アジア式関係説」をめぐる統一連体修飾構文仮説(GNMCCH)を再検討した。表層の形態素の羅列だけ考慮すると、日本語に代表される主要部後置型の複合名詞句には、英語の関係節や名詞補文などで見られるような細かい、統語的、意味的な性質が欠落しているように見えるが、それらの性質は、おそらく普遍的なものと考えられることができると思われる。

参考文献

- Bhatt, Rajesh (2002) "The Raising Analysis of Relative Clauses: Evidence from Adjectival Modification," *Natural Language Semantics* 10, 43-90.
Bugaeva, Anna and John Whitman (2014) "Deconstructing Clausal Noun Modifying Constructions," *Japanese/Korean Linguistics* 23, ed. by Michael Kenstowicz, Ted Levin and Ryo Masuda, CSLI Publications, Stanford.

もしも55cに「さんま」が「いわし」に置き換わるとどうなるか??

↑ なに20%
(自信がなくなそうにみえる)

- Comrie, Bernard (1996) "The Unity of Noun Modifying Clauses in Asian Languages," *Pan-Asiatic Linguistics: Proceedings of the Fourth International Symposium on Languages and Linguistics*, January 8-10, 1996, Volume 3, 1077-1088.
- Comrie, Bernard (1998) "Rethinking the Typology of Relative Clauses," *Language Design* 1, 59-86.
- Comrie, Bernard (2010) "Japanese and the Other Languages of the World," *NINJAL Project Review* 1, 29-45.
- Davis, Christopher (2006) "Evidence against Movement in Japanese Relative Clauses," Handout presented at ECO5 2006, Massachusetts Institute of Technology, March 4th, 2006.
- Han, Chung-hye and Jong-Bok Kim (2004) "Are There "Double Relative Clauses" in Korean?" *Linguistic Inquiry* 35.2, 315-337.
- Hasegawa, Nobuko (1981) *A lexical Interpretive Theory with Emphasis on the Role of Subjects*, Doctoral dissertation, University of Washington.
- Haig, John (1976) "Shadow Pronoun Deletion in Japanese," *Linguistic Inquiry* 7.2, 363-371.
- Haig, John (1996) "Subjacency and Generative Grammar: A Functional Account," *Studies in Language* 20.1, 53-92.
- Heycock, Caroline (1993) "Syntactic Predication in Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 2.2, 167-211.
- Hillsman, Bill (2004) *Run the Other Way: Fixing the Two-Party System, One Campaign at a Time*, Free Press, New York.
- Hoshi, Koji (1995) *Structural and Interpretive Aspects of Head-Internal and Head-External Relative Clauses*, Doctoral dissertation, University of Rochester.
- Hoshi, Koji (2004) "Parameterization of the External D-System in Relativization," *Language, Culture and Communication* 33, 1-50, Keio University.
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語 (上: 統語構造を中心に)』大修館書店, 東京.
- Kornfilt, Jaklin and Nadya Vinokurova (2012) "Turkish and Turkic Complex Noun Phrase Constructions," ms., Syracuse University.
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Matsumoto, Yoshiko (1993) (1997) *Noun-Modifying Constructions in Japanese: A Frame-Semantic Approach*, John Benjamins, Amsterdam.
- Matsumoto, Yoshiko, Bernard Comrie and Peter Sells (forthcoming) *Noun-Modifying Clause Constructions in Languages of Eurasia: Reshaping Theoretical and Geographical Boundaries* (tentative title).
- McGloin, Naomi Hanaoka (1985) "NO-Pronominalization in Japanese," *Papers in Japanese Linguistics* 10, 1-15.
- Ross, John Robert (1967) *Constraints on Variables in Syntax*, Doctoral dissertation,

MIT.

Sakai, Hiromu (1994) "Complex NP Constraint and case-conversions in Japanese," *Current Topics in English and Japanese*, ed. by Masaru Nakamura, 179–203, Kurosio, Tokyo.

寺村秀夫 (1975) 「連体修飾のシンタクスと意味 その1」『日本語・日本文化』4, 71–119, 大阪外国語大学留学生別科.

寺村秀夫 (1977a) 「連体修飾のシンタクスと意味 その2」『日本語・日本文化』5, 29–78, 大阪外国語大学留学生別科.

寺村秀夫 (1977b) 「連体修飾のシンタクスと意味 その3」『日本語・日本文化』6, 1–35, 大阪外国語大学留学生別科.

Whitman, John (1976) *Rules with Too Much Power*, Honors thesis, Harvard College.

Whitman, John (2013) "The Prehead Relative Clause Problem," *Proceedings of the 8th Workshop on Altaic Formal Linguistics*, ed. by UmutÖzge, 361–380, MIT Working Papers in Linguistics, Cambridge, MA.